

福田 敦史 講師

【ふくだ あつし】

2002年慶應義塾大学文学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学。2004年度より「論文の読み方・書き方」担当。専門は哲学・倫理学。とりわけ近頃、記憶と自我構成と世界理解との関連について考えています。



●論文の読み方・書き方
a1・a2・c1・c2

私は「論文の読み方・書き方」を担当していますが、ここでは、レポートや論文を読み書きする際の具体的な注意点ではなく、もう少し基礎的・根本的なことについて書きたいと思います。それは単純で素朴なことなのですが、皆さんに「分からない」ことを大切にしたい、ということです。

「分からない」ことを大切にすることの意義には大きく二つあります。一つは、私たちの「考える」という営為に関係しています。考えるとはどういうことなのか、思いのほか簡単には答えが出ないものなのですが、少なくとも、私たちが考える時には、何かある問いについて考えている、と言えるでしょう。自分が分からないことを放置せずに自分の問いとして育てあげ、それについて考えるという態度を身につけて欲しいと思います。

もう一つの意義は、世界に対する態度に関係するものです。私たちは、分からないことがあっても、それを自覚せず大切にしないでいると、分からないことがあったことをすぐ忘れてしまいます。すると、私たちは分からなかったことも分かったことにしてしまい、特段そのことを気にしなくなってしまう。それは文章であっても、世界内の出来事であってもです。本当は分からないところのある穴ぼこだらけのはずの文章や世界が、穴ぼこに気づけず、分かっているかのような平板なものになってしまうわけです。私たちが文章を読んだりいろいろな体験をしている時に、何の疑問も湧かない時、それは分からないことがないのではなく、分からないことがあることに自分が気づけなくなっているからなのかもしれません。これは随分と怖ろしいことではないでしょうか。

最後に一冊だけ本を紹介します（実は、他の人に本を紹介するということは、恐いことであり、恥ずかしいことであり、また傲慢なことでもあるように思うのですが）。今回の内容に関連したものとして、野矢茂樹[文]・植田真[絵]『はじめて考えるときのように』PHP文庫、2004年を挙げておきます。考えるということについて書かれた本はたくさんありますが、この本は類書とは異なる示唆を与えてくれるのではないかと思います。

「分からない」ことを大切にする